

〈共同討議Ⅱ概要報告〉

カントの心理学

城戸 淳

この共同討議は「カントの心理学」というテーマを掲げるが、とはいえもちろんカントが独自に唱えた心理学説があるわけではない。むしろ周知のようにカントは、批判哲学の超越論的な定礎の手続きにおいて、「心理学(Psychologie)」に対して批判的な警戒を怠らなかった。「カント 対 心理学」とでも呼びうる対決の局面は、三批判書をはじめ、さまざまな箇所に見届けることができる。しかし他方では、カントが積極的に当時の心理学の知見を活用しているような場面もある。そうした「カントにおける心理学」とでも呼びうる諸相は、これまでときにはカントの認識論や道徳理論に紛れこんだ悪しき心理学主義のように見えて論難されることも、こんにちの認知科学や道徳心理学の先取りのようにも見えて賞賛されることもあった。

心理学と対決しつつ、かつ心理学を活用するカント。「カントの心理学」という共同討議の課題は、このような多面的でしかも評価の分かれる問題事象をあらためて再検討すべく掲げられたものである。

共同討議において、渡邊浩一氏は、おもに理論哲学の諸局面に取材して、学説史的にカントと心理学との距離を測定しつつ、カントの「超越論的心理学」にこめられた認識論的洞察を探求した。永守伸年氏は、カント倫理学の理性主義を現代の道徳心理学からの批判に対して擁護しつつ、カントの「賢慮」概念にカント的な道徳心理学の可能性を見た。結果としてこの共同討議は、カントの心理学というテーマに、理論と実践、あるいは原理と応用という二方面から接近する構えとなった。現代の「自然化」という大きな思想潮流のなかで、われわれはカント哲学の真価をどこに求めるべきか。フロアからの質疑応答も含めて、そのありかを探るための共同討議であったように思われる。